

チェンバーズの『サイクロペディア』と『百科全書』の辞典項目museumとmuséeに関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学学芸員養成課程 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 臺, 由子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20557

チェンバーズの『サイクロペディア』と『百科全書』の辞典項目 *museum* と *musée* に関する一考察

臺 由子*

はじめに

2006年に『明治大学学芸員養成課程紀要』において『百科全書 (*Encyclopédie*)』¹の「ムセイオン」の項目について論じた。²それが契機となり用語の定義についていくつか論考を試みた。³

そして、修士論文『フランス博物館史—18世紀のフランスの辞典に見られる *cabinet* の項目を中心とした展示施設に関する比較研究—』も執筆するに至った。⁴これは、*cabinet* を中心に据え *garlie* や *musée* についての定義を含めて論考したものである。

この中で、『百科全書』がチェンバーズ⁵が編纂した『サイクロペディア (*Cyclopædia*)』⁶に影響を受けた産物であったことも述べた。この内容は2006年に発表した「ムセイオン」の項目に関連するため、その内容を発展させた論考として発表することとした。

ここでは、修士論文の第4章『『百科全書』における展示施設について』を発展させ、『百科全書』の *musée* の項目と『サイクロペディア』の *museum* の項目の関係性を指摘し、『百科全書』の *musée* の項目の構成について書誌学的視点に立って論ずるものである。

1. 『百科全書』の位置づけ

フランスの18世紀の著名な辞典には、出版順にリシュレ⁷の『フランス語辞典』⁸、フルチエール⁹の『フルチエール辞典』¹⁰、フランス・アカデミーの『アカデミー辞典』¹¹、

イエズス会¹²の『トレヴー辞典』¹³などがある。

『アカデミー辞典』は、『フランス語辞典』を剽窃と訴え、『フルチエール辞典』は『トレヴー辞典』に剽窃されるといった引用関係が多いものの、改版時に独自性を出す一方で、他を引用する改訂を行った。特にプロテスタントの編者が改訂した『フルチエール辞典』第二版¹⁴以降と、カトリックのイエズス会が『フルチエール辞典』初版を元に編纂した『トレヴー辞典』は、宗教家でありながら学者である人物たちが宗教観とその知を競うことによって作り上げてきた辞典といえよう。

一方、カトリックの宗教家たちが執筆者や内容の一部に宗教をないがしろにしていると『トレヴー誌』などで激しく攻撃した『百科全書』は、新しい知を提供してその存在を世に問うた。

ディドロ¹⁵は『百科全書』の編纂者の一人であったが、一方では執筆者でもあった。彼の執筆した項目には「*」の印がその冒頭に付されているか、何の印もない場合も多いが、その文体や執筆の内容に「他者の言説に対する近傍や大綱としてペンを握る」という姿勢で「他者の声を自分の中に入れ、それを变形してズレや差異を生産するディドロの戦略や書き方」によって、キリスト教の先行する作品の元の文章に修正を加え、カトリシズムの定義に対抗する見解を構築していった¹⁶。

一方、モレリ¹⁷、フルチエール、ベール¹⁸、

* 明治大学大学院文学研究科博士後期課程

『トレヴー辞典』と連なる位置に『百科全書』を置き、これらの辞典は「物の名づけと分類をめぐる17世紀以来の知的抗争の中にあった」とするマリー・レカ＝ツィオミスの業績に対して、王寺賢太は自身の考えと共感すると指摘する。¹⁹

つまり、『百科全書』は、宗教とは一線を画し、18世紀の辞典における命名と分類の中に位置するものであると考えてよいだろう。

2. 「百科全書」の誕生

『百科全書』の誕生は、イギリスで刊行された『サイクロペディア』のフランス語版を編纂することから始まった。第1巻の刊行までの道のりは次のようなものであった。

1745年、出版業者ゼリウスとル・ブルトンが手を組み、イギリス人ジョン・ミルズと契約を結び、フランス語による『サイクロペディア』の増補改訂版を計画した。編纂者たちを集め、国王から出版許可を獲得、趣意書を配布した。この時の計画は、決して革新的な内容ではなく、『トレヴー誌』にも好意的な扱いを受けた。しかし、この計画は1745年にル・ブルトンらの提携が解消され、出版許可も取り消しとなった²⁰。

ル・ブルトンは、過去に共同で出版計画をしたことのあるフランス人出版業者と合同でこの計画を進めることにし、1746年から1748年にかけて契約を交わした。國務諮問会議による出版許可取消しの破棄と大法官ダゲッソーにより辞典の出版許可が更新された²¹。

出版業者たちは、ダランベールとディドロを含む編纂者たちを編成した。1746年に出版責任者としてマルヴェース²²と契約するが、1747年に解消すると、ダランベールとディドロが共同出版責任者となり、1748年に新たに出版許可を取得し、編集方針には変更がないが規模を拡大し、タイトルも『百科全書』あるいはチェンバーズ、ハリス、ダイチ、その他の辞典から翻訳、加筆された学問、

工芸に関する普遍辞典』と変更となった²³。

ディドロは、匿名で刊行した『盲人書簡』が反体制的としてヴァンセンヌの牢獄に収監されたが、1750年に彼が執筆した『百科全書』の最終的な『趣意書』8,000部が配布となった。これに対し、1751年に『トレヴー誌』で『百科全書』への激しい批判が発表され、ディドロらは反論で応酬した。そして、『百科全書』第1巻は1751年6月に刊行された²⁴。『トレヴー誌』の攻撃は、1762年に高等法院からイエズス会の教会と修練所の閉鎖を命じられ、イエズス会が失墜するまで続いた²⁵。そして、悪意ある購読者から訴訟を受けた²⁶。一方では協力者や擁護者も多く²⁷、何より刊行を待ち望む予約購読者がフランスだけでなく国外にも存在し、最終的に『百科全書』は、全印刷数が4,225部に達したという²⁸。

ところで、『百科全書』の企画者たちは、『サイクロペディア』のどの版を基にフランス語版を企画したのだろうか。

3. 「百科全書」の「第一趣意書」からみた「サイクロペディア」

『百科全書』の『第一趣意書』の配布された1745年までには、チェンバーズ『サイクロペディア』は少なくともロンドンで5版を重ねているが、『百科全書』には参照した『サイクロペディア』の版について記載がない。それを解決しようと試みたのが『第一趣意書』の分析であった。

『第一趣意書』のオリジナルは、パリ国立図書館に収蔵されている分類番号「Bibl. Na. Maa. Fr. 220.069.Fo266」であるとJoseph Le Grasが1928年に報告している²⁹。Douglas H. GordonとNorman L. Torreyが1947年に刊行した書物にバルディモア大学に所蔵していると記述とタイトルの掲載があった³⁰。また、鷺見洋一の調査によって、このコレクションは現在バージニア大学に移籍しているが、ページ数の点などから確実に本物である

かの確証が得られていないという³¹。

鷺見は、これらを誰も直接閲覧していない上に論考していないと、『サイクロペディア』の各版と『百科全書』の比較照合と『第一趣意書』の検討を提案した³²。

参照した『サイクロペディア』の版を明らかにするために『第一趣意書』が重要であるとして、1996年に慶應義塾大学三田メディアセンターが購入した『第一趣意書』の「大気 (Atmosphere / Atmosphère)」の冒頭の数行を『サイクロペディア』と『百科全書』で比較した。『サイクロペディア』初版(1728)と第二版(1738)には綴りの違いがあるが内容は同じである。一方、加筆された内容がある『サイクロペディア』ロンドン版(1741)とダブリン版(1742)そして『第一趣意書』にもこの増補部分の訳出があり、参照したのは初版ではなく、以降の版や近接した版を参照して『第一趣意書』が起草されたと指摘した³³。

そして、イレヌ・パスロンが『サイクロペディア』ロンドン版の1741年から1743年に刊行されたものか、ダブリン版の1742年版をフランス語に訳出して増補改訂を行い、作成したのだと指摘した³⁴。

4. チェンバースと『サイクロペディア』

チェンバースは、イギリスの湖水地方のケンドルの農家の息子として生まれた。ヘーヴェルシャムのグラマースクールに通った。彼の人生については、若くしてロンドンに出て、1714年から1721年の間、ロンドンの地球儀メーカーのジョン・セネックスに弟子入りしていたことくらいしか知られていない。1728年に『サイクロペディア』初版全2巻を刊行して王に捧げた。その他、書評を出版した文学誌 (Literary Magazine、1735-1736) にも原稿を執筆し、フランス語の化学のテキストを翻訳するなどの仕事もしている。

チェンバースの『サイクロペディア』は、

クロスレファレンスの手法を取っており、この事により、アルファベット順で項目が並んでいても、関連項目を参照することができるようになっていた。

『サイクロペディア』は、人気があり何度も版を重ね、18世紀の間で英語版だけでロンドンとダブリンで7版あることが知られている。

初版は1728年、全2巻、ロンドン。第二版は1738年、全2巻、ロンドン。第三版は1740年、全2巻、ダブリン。第四版は1741年、全2巻、ロンドン。第四版は1741年、全2巻、ロンドン。第五版と銘打つものには、1741年と1743年の組み合わせの全2巻ロンドン版と1742年のダブリン版全2巻がある。第六版は1750年、全2巻ロンドン版。第七版は1751年から1752年、全2巻、ロンドン版である³⁵。

『サイクロペディア』の *museum* と『百科全書』の *musée* の比較は表1に示した。

ここでは、『百科全書』を編纂するにあたって、フランス語訳に用いたとの指摘がある1742年ダブリン版(第五版)を利用する。使用する資料は、フランス国立図書館所蔵のものをリプロダクションを依頼しPDFを入手した。その他の版は、初版は臨川書店から1988年に刊行された『チェンバース『百科事典』1728年初版復刻本』、1743年ロンドン版(第五版)は、googelにて入手したものであり、ダブリン版と差異のある部分のみを(*)として示してある。

なお、『百科全書』は、Friedrich Frommann Verlagより1966年に刊行された初版(1751-1780)のリプリント版を使用する。

5. 『百科全書』の *musée* と『サイクロペディア』の *museum*

『百科全書』の項目執筆のために引用された典拠に関する研究は、そのデータベース化が始められており、「執筆者が用いる典拠

の傾向と「人間知識の体系図解」の分類における典拠の傾向が浮かび上がってくる」と、評価されるものであるという³⁶。

『百科全書』の *musée* の項目は、ジョクール³⁷によって編纂されている。

その前半 2/3 はアレクサンドリアのムセイオンのことを述べ、残りの 1/3 がイギリスのアシュモレアン・ミュージアムの説明である。

引用関係をみると、ムセイオンについては『サイクロペディア』の *museum* の項目³⁸の前半のアレクサンドリアのムセイオンの項目を大幅に書き換え、一方のオックスフォードのアシュモレアン・ミュージアムについては『サイクロペディア』の記述をフランス語訳をして掲載している。

最初のアレクサンドリアのムセイオンについての記述について述べているこの部分は、記述の最後に *Mém. de l'Acad. tome IX.* と引用元が記されている。これは、『パリ王立碑文・文芸アカデミー論集』³⁹ 9 巻の後半を占める *Mémoire* に掲載された論文からの引用であることを示している⁴⁰。

引用文献は、ボナミー⁴¹の「アレクサンドリア図書館に関する論考」⁴²である。エジプトのプトレマイオス 1 世⁴³の事業アレクサンドリア図書館 (*bibliothèque d'Alexandria*) を論じ、「アレクサンドリアのアカデミア (*Academie d'Alexandria*)」は「ムセイオン (*musée*)」であると記述がある。

ジョクールは、この論文の 401 頁から 402 頁と 411 頁から 413 頁にわたる記述を引用し、要約することで *musée* の定義の一つであるムセイオンの説明とした⁴⁴。

次に、今日的な意味の博物館につながる記述がある。「ムセイオンの用語は、以後、より広い意味を受け入れ、今日、学芸やミュージタチに直接に関するモノを収容するすべての場所に適用している」、そして、キャビネを参照せよと述べている⁴⁵。

次にアシュモレアン・ミュージアムに関す

る記述がくる。表に示したとおりイギリスの定義とフランスの定義がほぼ同じであり、『サイクロペディア』の原文をフランス語に翻訳したと言えるだろう。

オックスフォードのミュージアムはアシュモレアン・ミュージアムと呼ばれ、多種多様な学識の向上と完全のために大学が建築した大建造物である。建築は 1679 年に始まり 1683 年に完成した。同時期に、平貴族エリアス・アシュモールがオックスフォード大学に寄贈した珍品の膨大なコレクションは、博物館の最初の管理者となったプロット博士によって、受け入れ・整理・展示がなされた。

これ以降、このコレクションは著しく増え、中でもハンチントン博士の寄贈したエジプトの非常に多くのヒエログリフと様々な珍しいもの、グッドイヤー氏寄贈の完全なミイラ、リスター氏の寄贈した博物学のキャビネ、そして祭壇・メダル・ランプのような古代ローマの色々な古美術品などである。

ミュージアムの入口に、次の文字が読める「アシュモレアン・ミュージアム、博物学教室、化学実験室」⁴⁶。

このようにアシュモレアン・ミュージアムは、珍品のコレクションを収蔵し、展示した施設であったことがわかる。

ところが、フランスでは、同じように珍品を収蔵したり展示する場所や収納する器物を *musée* とは呼んでいなかった。

6. 『百科全書』の *cabinet* (陳列室)

アシュモレアン・ミュージアムと同じような施設をフランスでは *cabinet d'histoire naturelle* (博物学の陳列室) と呼んでおり、その有名なものの一つに「王の陳列室 (*Cabinet du Roi*)」をあげることが出来るだ

ろう。

『百科全書』中のドーバントン⁴⁷による「王の陳列室」についての評価は、「王の植物園のそれは、ヨーロッパで最も豊かなものの一つである (Celui du jardin du Roi est un des plus riches de l'Europe)」であった⁴⁸。そして、そのコレクションは、公開されていたのだが、その展示方法は次のように紹介された。

Toutes ces collections sont rangées par ordre méthodique, & distribuées de la façon la plus favorable à l'étude de l'Histoire naturelle. Chaque individu porte sa dénomination, & le tout est placé sous des glaces avec des étiquettes, ou disposé de la manière la plus convenable.

これらのコレクションは、体系的な序列で並べられ、博物学の学習に最も有利な方法で配置されている。それぞれの個体はその名称を付けている、すべては題箋と共に板ガラスの上に据えられ、あるいは最も適切な方法で配置されている⁴⁹。

このように、博物学を学ぶために最もふさわしい配置と体系的な序列によって、資料は名称を付けて題箋が資料と共にガラスの板の上やその他の適切な方法で展示されている様子がわかる⁵⁰。

このように、『百科全書』に引用されたアシュモレアン・ミュージアムについての記述と王の陳列室の記述から、イギリスでは museum (ミュージアム) と呼称した展示施設をフランスでは cabinet (陳列室) と呼んでいたことがわかる。

『百科全書』の中で展示施設についての項目や記述には、絵画の展示をしている廊下を garelie (ギャラリー)⁵¹、部屋を cabinet (キャビネ、陳列室)⁵² と紹介していた。

そして、フランスで展示室や展示をしてい

た場所がキャビネやギャラリーといった建造物の名称で呼ばれていた時代においては、musée や muséum はムセイオンを指す名称としての重さが勝っていたようである。

フランス革命下で Cabinet du Roi (王の陳列室) のある Jardin du Roi (王の植物園) が Muséum d'Histoire naturelle (自然誌博物館) という名称へ変わる。あるいは、ルーヴル宮が muséum や musée の名称を付けた Muséum central des arts (中央美術博物館) や Musée Napoléon (ナポレオン美術館) へと変わって行くことになる。

ところが、この名称の変化が何によって引き起こされたのかを知る手立ては、18世紀のフランス語の辞典の中に記述された musée や muséum の項目からは、うかがい知ることが出来なかったとしか言えないだろう。

この変化が断絶であるのか継続であるのかを知るためには、対象とするフランス語辞典を19世紀に広げて検証する必要があるが、辞典はコンパクト化し、記述も簡略化されていく傾向があるため、他の資料で補足せざるを得ないだろう。

そこで、社会変化にその要素を求め、学術と資料の動きを丹念に追っていくことによる検討が必要であろうと思われる。

終わりに

フランス語の辞典の中で、musée の項目の初見は、『トレヴー辞典』第二版 (1721) であるが、アレクサンドリアのムセイオンについての定義であった。

なお、展示施設としての定義として musée や muséum が現れてくるのは、『トレヴー辞典』第五版 (1752) 年である。『アカデミー辞典』第五版 (1798) では、今日的な博物館に結びつくような用語としてミュゼやミュージアムの説明が示され、以降、他の辞典にも影響を与えたことを指摘しておこう。この件は、稿を改めて論ずる予定である。

末筆ながら、修士論文を執筆するにあたって、根気よく指導をしてくださった放送大学の青山昌文教授、今後の指針とすべき助言をくださった日本大学芸術学部木村三郎教授、慶応義塾大学文学部金山弘昌教授に心よりお礼を申し上げる（職位は当時のもの）。

註

- 1 *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres* Tome1-17 1751-1772
ここでは『百科全書』, *Encyclopédie* と略称する。
- 2 蠢 由子 『『百科全書』“*Encyclopédie*”に記載されているムセイオンの項目についての考察』『明治大学学芸員養成課程紀要』17 pp.15-22, 2006, 明治大学 東京。
今回、『百科全書』の項目の翻訳を見直し、いくつかの訂正をこの論考で行っている。
- 3 蠢 由子 「17世紀から18世紀前半におけるフランスとネーデルラントの辞典項目「キャピネ」と「クンストカマー」についての考察」『明治大学学芸員養成課程紀要』26 pp.15-29, 2015, 明治大学 東京。「江戸時代の蘭和辞書『ドゥーフハルマ』とハルマの『蘭仏辞典』に見られる「クンストカマー (konstkamer)」の項目について」『明治大学学芸員養成課程紀要』27 pp.13-28, 2016, 明治大学 東京。「箕作阮甫による蘭語の博物館関連用語の和訳について」『一滴』24 pp.69-91, 2017, 津山洋学資料館 岡山
- 4 蠢 由子 放送大学大学院提出修士論文『フランス博物館史—18世紀のフランスの辞典に見られる cabinet の項目を中心とした展示施設に関する比較研究—』2018
- 5 Ephraim Chambers, (1680-1740) イギリスの辞典編集者。
- 6 E. Chambers *Cyclopædia : or an Universal Dictionary of Arts and Sciences ; ... Vol.1-2* 1728年 (1st edition) ここでは『サイクロペディア』, *Cyclopædia* と略称する。
- 7 César-Pierre Richelet (1631-98) フランスの辞書の最初の編纂者
- 8 Richelet *Dictionnaire François, contenant les Mots et les Choses, plusieurs Nouvelles remarques sur la Langue Française*, 1680 (1er édition) ここでは『フランス語辞典』と略称する。
- 9 Antione Furetière (1619-1688) フランスの文学者。カトリックの聖職者。アカデミー・フランセーズ会員。1684年『普遍的辞典試論 (*Essai d'un dictionnaire universel*)』を出版する。死後に『フルチエール辞典』が出版される。
- 10 Antoine Furtière *Dictionnaire Universel, Contenant generalement tous les Mot François tant vieux que modernes, & les Termes de toutes les Science et des Arts, ...* 1690 (1er édition)
正式名称が長い為、『フルチエールの辞典 (*Dictionnaire de Furetière*)』, 『普遍的辞典』, 『汎用辞典』, 『万有辞典』, フルチエールの『フランス語辞典』など多様に呼称される。ここでは、『フルチエール辞典』 *Dictionnaire Universel* と略称する。
- 11 Académie Française *Le Dictionnaire de l'Académie Française, dédié au Roy* Tome1-2, 1694 (1er édition) ここでは『アカデミー辞典』と略称する。
- 12 イエズス会士は、フランスのアン県トレヴーを拠点とした。ルイ15世によってイエズス会は1764年に禁止されるが、1771年に『トレヴー事典』全8巻が刊行された。
- 13 Trévoux *Dictionnaire universel françois et latin : contenant la signification et la définition... des mots de l'une et de l'autre langue... la description de toutes les choses naturelles... l'explication de tout ce que renferment les sciences et les arts*, 1704 (1er édition) ここでは『トレヴー事典』と略称する。
- 14 Furtière et Basnage *Dictionnaire Universel* 1701
- 15 Denis Diderot (1713-1784) フランスの哲学者、作家、美術評論家。百科全書派の中心人物の一

- 人。
- 16 逸見龍生「逸見龍生，王寺賢太，田口卓臣〈座談会〉今，ディドロを読むために」 pp.13-14, pp.15-16 『思想』 1076, pp.6-48, 2013, 岩波書店 東京
- 17 Louis Moréri (1643-1680) フランスの学識者。カトリックの司祭，神学博士。1674年に『大歴史辞典 (*Le Grand Dictionnaire historique*)』を出版。
- 18 Pierre Bayle (1647-1706) フランスの哲学者，思想家。南仏ル・カルラ生まれ。プロテスタント (カルヴァン派) のためネーデルラント・ロッテルダムに移住。1696年に『歴史批評辞典 (*Dictionnaire historique et critique*)』を刊行。
- 19 王寺賢太 pp.16-17, 2013
- 20 マドレーヌ・ピノー／小嶋竜寿 訳 『『百科全書』』 p.19, 2017, 白水社 東京
- 21 ピノー 2017, pp.19-20
- 22 ピノーの『百科全書』(2017 p.20) には，ジャン＝ポール・グアード・マルヴとある。ここでは，鷺見洋一 (1999) の記載に倣う。
- 23 ピノー 2017, pp.20-21
- 24 ピノー 2017, pp.21-23
- 25 ピノー 2017, pp.24-42
- 26 ピノー 2017, pp.45-47
- 27 ピノー 2017, pp.43-44
- 28 ピノー 2017, p.47
- 29 Jeseph Le Gras *Diderot et l'Encyclopédie* p.33, Editions Edger Malfère, 1928
- 30 Douglas H. Gordon and Norman L. Torrey, *The Censoring on Diderot's Encyclopédie and the Re-establishes Text*, Coloumbia University Press, New-York, 1947
- 31 鷺見洋一「『百科全書』第一趣意書の重要性: チェンバーズ問題解明のために」 pp.331(154)-330(115), p.320(165), 『藝文研究 77』 pp.318(167)-334(151), 1999, 慶應義塾大学藝文学会
- 32 鷺見 1999, p.327(158)
- 33 鷺見 1999, pp.325(160)-321(164)
- 34 Irène Passeron, 'Quelle(s) éditon(s) de la Cyclopædia les encyclopédistes ont-ils utilisée(s)?' *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie* 40-41, pp.287-292, 2006
- 35 Irène Passeron 2006
- 36 淵田 仁「『百科全書』項目の構造及び典拠研究の概要」『百科全書の時空』 pp.354-365, 2018, 法政大学出版局
- 37 Louis de Jaucourt (1704-1780) 医師，『百科全書』の執筆者。
- 38 Chambres 'MUSEUM, MOYΣ EION' *Cyclopaedia* Vol. 2, 頁記載なし, 1742, Dublin
- 39 *Histoire de l'Académie royale des inscriptions et belles-lettres, avec les Mémoires de littérature tirés des registres de cette académie* T.1-51 Académie royale des inscriptions et belles-lettres, 1663-1843
- なお，このシリーズには *Mémoire* のものと *Histoire* と *Mémoire* の二部構成の編集のものがある。*His. avec Mém. d'Academie des belles-lettres* と略称する。
- 40 臺 2006 の注 20 にて *Mémoires des Littérature tirez des registres de l'Académie Royal des Iscription et Bells-Lettres* と指摘したが，ここに訂正する。
- 41 Pierre-Nicolas Bonamy (1694-1770) 歴史家。1727年に碑文文芸アカデミー会員となる。
- 42 Bonamy 'Dissertation historique sur la Bibliothèque d'Alexandrie' *His. avec Mém. d'Academie des belles-lettres* T.IX pp.397-415 (in Mémoire) Académie royale des inscriptions et belles-lettres 1736
- 当該図書は Googl Books にて公開，オーストリア国立図書館の所蔵本。(2018/12/1 最終確認)
- 43 Ptolemaios I 尊称「ソテル (救済者)」, Πτολεμαῖος (紀元前 367 年頃 - 紀元前 282 年) 在位: 紀元前 305 年 - 紀元前 282 年, プトレマイオス朝の初代ファラオ
- 44 表 1 の『百科全書』の項目でボナミーの記述からの引用部分は____で示してある。
- 45 臺 2006, p.15-16

- 46 Jaucout 'MUSÉE' *Encyclopédie* Tome 10, p.893, 1765
- 47 Louis Jean-Marie D'Aubenton (1716-1799) 医師, 自然誌の研究者。ビュフォンの『博物誌』の執筆者。パリの「王の植物園」の鉱物学の教授。科学アカデミーの正会員 (1795-)。
- 48 Daubenton 'CABINET D'HISTIORE NATURELLE' *Encyclopédie* Tome2, p.489, 1752
- 49 Daubenton 1752, p.490,

- 50「王の陳列室」については、ディドロがビュフォンの『博物誌』から大きく引用し、その特質について述べているのだが、ここでの趣旨と外れることになるため、紹介はしない
- 51 Jaucout 'GALERIE' *Encyclopédie* Tome 7, p.441, 1754, Watelet 'GALERIE' *Encyclopédie* Tome 7, pp.443-444, 1754
- 52 Blondel 'CABINET' *Encyclopédie* Tome 2, pp.448-449, 1752

表1 『サイクロペディア』の museum の項目と『百科全書』の musée の項目

<p>チェンバース 『サイクロペディア』 ロンドン版 初版</p> <p><i>Cyclopaedia; or an universal dictionary of arts and sciences: ...</i> E. Chambers, 1728, London</p>	<p>チェンバース 『サイクロペディア』 ダブリン版第二版(第五版) (ロンドン版 第五版)</p> <p><i>Cyclopaedia; or an universal dictionary of arts and sciences: ...</i> E. Chambers, 1742, Dublin (*E. Chambers, 1743, London)</p>	<p>凡例 : 次の版で消滅 : 初版に追加 ---: 初版との微細な 綴りなどの相違</p>	<p>『百科全書』</p> <p><i>Encyclopédie, ou, dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres</i> 1765</p>	<p>凡例 : Bonamy 'Dissertation historique sur la Bibliothèque d'Alexandrie' <i>Mém. de l'Acad. tome IX</i> の記述からの引用</p>
Vol. 2 p.605	Vol.2, ページ記載なし (*Vol.2, ページ記載無し)	訳文	Tome10, pp.893-894	訳文
<p>MUSEUM, was originally used to signify a Place in the Palace of <i>Alexandria</i>, which took up at least a fourth part of the City; so call'd as being destin'd and set apart to the <i>Muses</i>, and the Sciences. See <i>Muse</i>.</p>	<p>MUSEUM, MOYSEION, was originally used to signify a place in the palace of Alexandria, which took up at least a fourth part of the city; so called, as being destined and set apart to the <i>Muses</i>, and the sciences. See <i>Muse</i>.</p>	<p>ムセイオン、ムセイオン。元来アレクサンドリアの宮殿にある場所を意味して用いられ、少くとも都市の1/4の場所を占めている；ミュージアと学術に定められた目的付けられたとしてそのように呼ばれた。ミュージアを参照せよ</p>	<p>MUSEE, s. m. (<i>Gram</i>) lieu de la ville d'Alexandrie en Egypte, où l'on entretenoit aux dépens du public, un certain nombre de gens de lettres distingués par leur mérite, comme l'on entretenoit à Athenes dans le Prytane les personnes qui avoient rendu des services importants à la république. Le nom des Muses, déesses & protectrices des beaux Arts, étoit incontestablement la source de celui du musée. <i>Le musée</i> situé dans le quartier d'Alexandrie</p>	<p>ムセイオン、単数、男性（文法）は、エジプトの首都アレクサンドリアの場所、そこでは公的な資金で幾人かの卓越した功績で文芸の才能ある人々を抱えていた、あたかもアテネで市民に重要な貢献をした人物たちであるブリュタニスを抱えたように。芸術の女神で擁護者であるミュージアの名は、ムセイオンの語源であると明らかだ。ムセイオンは、アレクサンドリアのブルケイオンと呼ばれる場所に位置し、ストラボンによれば、歩き回るための柱廊と廊下、文芸7科を授けるための大きな部屋、学者が集まり食事をする特別な部屋などが設備された大きな建物であった。この大建造物は文芸の愛好者で擁護者であったプロテマイオス王たちの荘厳な記念物である。</p>
<p>Here were lodged and entertained a great number of learned Men, who were divided into Companies or Colleges, according to the Sciences or Sects whereof they were Professors.</p>	<p>Here were lodged and entertained a great number of learned men, who were divided into companies or colleges, according to the sciences or sects whereof they were professors. — And to each house or college was allotted a handsome revenue</p>	<p>ここでは、教授たちの学術や学術に応じて、カンパニーやカレッジに分けられた多くの学習者たちを泊めてもてなした。</p>	<p>appellé <i>Bruchion</i>, étoit selon Strabon, un grand bâtiment orné de portiques & de galeries pour se promener, de grandes salles pour conférer des matières de Littérature, & d'un salon particulier où les savans mangeoient ensemble. Cet édifice étoit un monument de la magnificence des Ptolémées amateurs & protecteurs des Lettres.</p>	<p>ムセイオンには、建物の維持と居住者を養うための特別予算があった。神官はエジプトの王によって任命され、主</p>
<p>To each House or College, was allotted a handsome Revenue.</p>	<p>— This establishment is attributed to Ptolemy Philadelphus, who here fixed his</p>	<p>二そして、それぞれの住宅とカレッジには手厚い歳入が割当てられた。</p>	<p><i>Le musée</i> avoit ses revenus particuliers pour l'entretien des bâtimens & de ceux qui l'habitoient. Un prêtre nommé par les rois</p>	<p>宰した。ムセイオンの滞住者は、[図書館の実益の管理だけでなく、彼らの学術集会よって、文芸の嗜好を養い、競争心を駆り立てるのにも一役買ひ；必要な扶養と保護によって研究に専念することができた。この幸福で静かな生活は、報償であると同時に才能と学識の証であった。</p>
<p>This Establishment is attributed to Ptolemy Philadelphus, who here fixed his Library. See LIBRARY.</p>	<p>library. See LIBRARY.</p>	<p>二この建物は図書館をここに用意したプロテマイオス・フィラデルフィウスに帰属する。図書館を参照せよ。</p>	<p>d'Égypte, y présidoit. Ceux qui demeuroient au musée, ne contribuoient pas seulement de leurs soins à l'utilité de la bibliothèque; mais encore par les conférences qu'ils avoient eues, ils entretenoient le goût des belles-Lettres, & excitoient l'émulation; nourris & entretenus de tout ce qui leur étoit nécessaire, ils pouvoient se livrer tout entiers à l'étude. Cette vie heureuse & tranquille étoit la récompense, & en même tems la preuve du mérite & de la science.</p>	<p>ジュリアス・シーザーがブルケイオンを包圍し、近くの港に停泊する船中に放火させた時、アレクサンドリア図書館が消失した戦火でムセイオンが残ったかは不詳である。もし、ムセイオンが不運に見舞われたとしたら、復旧活動をしたことは確かだ；それは、ストラボンが『地誌』を執筆したティベリウスの時代に、当時存在する大建造物として語っているからである。</p>
<p>On ne sait positivement si le musée fut brûlé dans l'incendie qui consuma la bibliothèque d'Alexandrie, lorsque Jules-César assiégé dans le Bruchion, fut obligé de mettre le feu à la flotte qui étoit dans le port voisin de ce quartier. Si le musée fut enveloppé dans ce malheur, il est certain qu'il fut rétabli depuis; car Strabon qui écrit sur sa géographie sous Tibère, en parle comme</p>				

		<p>d'un édifice subsistant de son tems. Quoi qu'il en soit, les empereurs romains devenus maîtres de l'Égypte, se réservèrent le droit de nommer le prêtre qui présidoit au musée, comme avoient fait les Ptolemées. L'empereur Claude fonda encore un nouveau musée à Alexandrie, & lui donna son nom. Il ordonna qu'on y lut alternativement les Antiquités d'Étrurie, & celles des Carthaginois, qu'il avoit écrites en grec. Il y avoit donc des leçons réglées & des conférences faites par des professeurs, très fréquentées, & auxquelles les princes même ne dédaignoient point d'assister. Strabon nous apprend qu'il Hadrien étant venu à Alexandrie, y proposa des questions aux philosophes, & répondit à celles qu'ils lui firent, & qu'il accorda des places dans le musée à plusieurs savans. La ville d'Alexandrie s'étant révoltée sous l'empire d'Aurélien, le quartier du bruchion où étoit aussi la citadelle, fut assiégé, & le musée détruit. Depuis ce tems-là le temple de Serapis & son musée furent la demeure des livres & des savans. Mais sous Théodore, Théophile patriarche d'Alexandrie, homme ardent, fit démolir & le temple & le musée; ensuite que la réputation de cette dernière école fut tout ce qui en subsista jusqu'à l'année 630 de Jesus-Christ, que les Sarasins brûlèrent les restes de la bibliothèque d'Alexandrie. <i>Mém. de l'Acad. tome IX.</i></p>	<p>いずれにせよ、ローマの皇帝たちがエジプトの支配者になったが、プトレマイオス王たちがしたように、ムセイオンの神官の任命権を確保した。皇帝クラディウスはアレクサンドリアに彼の名を冠した新しいムセイオンを設立した。彼は、ギリシア語で執筆した『エトルリア史』と『カルタゴ史』の古代文明を交互に読むよう命じた。そのため、定期的な授業や頻繁な教授たちの講義があったが、皇子たちですら軽蔑して少しも出席しなかった。スパルティアヌスは、ハドリアヌスがアレクサンドリアを訪れ、哲学者たちに質問をし、哲学者は皇帝に答えさせたりした。多くの学者をムセイオンに席を与えたと、我々に知らしめた。首都アレクサンドリアは皇帝アウレリアヌスの時代に城壁のあるブルケイオン周辺で反乱が起き、ムセイオンは破壊された。この時代、セラピオンの寺院とムセイオンは書籍と学者たちの都となった。しかし、テオドシウス1世の時代、アレクサンドリアの総大司教テオフィロスは強烈な人物で、神殿を破壊した；したがって最後の学派の評判は紀元630年までは残った。サラセン人がアレクサンドリア図書館の残りを燃やした。 <i>Mém. de l'Acad. tome IX.</i></p>
<p>Hence the word <i>Museum</i> has pass'd into a general Denomination, and is now apply'd to any Place set apart as a Repository of Things that have some immediate Relation to the Arts or the <i>Muses</i>, whence the Word first took its Rise. See <i>Repository</i>, etc.</p>	<p>MUSEUM has hence passed into a general denomination; and is now applied to any place set apart as a repository for things that have some immediate relation to the arts, or the muses. See <i>Repository</i>, <i>Cabinet</i>, etc.</p>	<p>従って、ミュージアムの用語は、一般的名称の一部となり；今日、芸術やミュージアムに直接に関するモノを収納目的のどんな場所にも適応している。そのために用語はその由来の始めとされる。倉庫、キャビネ、他を参照せよ。</p>	<p>Le mot de <i>musée</i> a reçu depuis un sens plus étendu, & on l'applique aujourd'hui à tout endroit où sont renfermées des choses qui ont un rapport immédiat aux arts & aux muses. Voyez <i>CABINET</i>.</p> <p>ムセイオンの用語は、以後、より広い意味を受け入れ、今日、学芸やミュージアムに直接に関するモノを収容するすべての場所に適応している。キャビネを参照せよ。</p>
<p>The <i>Museum</i> at <i>Oxford</i>, call'd the <i>Ashmolean Museum</i>, is a noble pile erected at the Expence of the University, for the promoting and carrying on several Parts of curious and useful Learning. It was begun in 1679, and finished in 1683; at which time, a valuable Collection of curiosities was presented to the University by <i>Elias Ashmole</i> Esq; and the same day there repositied, and afterwards digested and put in a just order by <i>Dr. Plot</i>, who was constituted first keeper of the <i>Museum</i>.</p>	<p>The <i>MUSEUM</i> at <i>Oxford</i>, call'd the <i>Ashmolean museum</i>, is a noble pile erected at the expence of the university, for the promoting and carrying on several parts of curious and useful learning. It was begun in 1679, and finished in 1683; at which time a valuable collection of curiosities was presented to the university by <i>Elias Ashmole</i>, Esq; and the same day there repositied, and afterwards digested and put in a just order by <i>Dr. Plot</i>, who was constituted first keeper of the <i>museum</i>.</p>	<p>オックスフォードのミュージアムはアシュモレアン・ミュージアムと呼ばれ、多様な珍品と有用な知識を大学の費用で建築した壮大な大建造物である。1679年に始まり、1683年に完成した。珍品の貴重なコレクションは、エアリア・アシュモールが大学に寄贈した；同日、ミュージアムの最初の管理者となったプロット博士によって受入れ・整理・展示がなされた。</p>	<p>Le <i>musée</i> d'<i>Oxford</i>, appellé <i>musée ashmoleen</i>, est un grand bâtiment que l'Université a fait construire pour le progrès & la perfection des différentes sciences. Il fut commencé en 1679 & achevé en 1683. Dans le même tems, <i>Élie Ashmole</i>, écuver, fit présent à l'université d'<i>Oxford</i> d'une collection considérable de curiosités qui y furent acceptées, & ensuite arrangées & mises en ordre par le docteur <i>Plot</i>, qui fut établi premier garde du <i>musée</i>.</p> <p>オックスフォードのミュージアムは、アシュモレアン・ミュージアムと呼ばれ、多様な学識の向上と完全のために大学が建築した大建造物である。建築は1679に始まり、1683年に完成した。同時期エアリア・アシュモールがオックスフォード大学に寄贈した珍品の膨大なコレクションは、ミュージアムの最初の管理者となったプロット博士によって受入れ・整理・展示がなされた。</p>
<p>Divers considerable Accessions have been since made to the <i>Museum</i>; as of Hieroglyphics, and other <i>Egyptian</i> Antiquities by <i>Dr. Huntingdon</i>; of an entire Mummy by <i>Mr. Goodyear</i>; of a Cabinet of natural Rarities by <i>Dr. Lister</i>; as also of divers Roman Antiquities, Altars, Medals, Lamps, etc.</p>	<p>Divers considerable accessions have been since made to the <i>museum</i>; as of hieroglyphics, and other Egyptian antiquities, by <i>Dr. Huntingdon</i>; and of an <i>ipniré</i>* mummy by <i>Mr. Goodyear</i>; of a cabinet of natural rarities by <i>Dr. Lister</i>; as also of divers Roman antiquities, altars, medals, lamps, etc. (*entire)</p>	<p>ミュージアムができて以来、いくつかの注目値する追加物がある；ハンチントン博士のヒエログリフとエジプトの古代美術；グッドイヤー氏の完全なミイラ；リスター博士の自然の珍品のキャビネ；そして様々なローマの古美術、祭壇、メダル、ランプなど</p>	<p>Depuis ce tems, cette collection a été considérablement augmentée, entr'autres d'un grand nombre d'hieroglyphes, & de diverses curiosités égyptiennes que donna le docteur <i>Huntingdon</i>, d'une momie entière donnée par <i>M. Goodgear</i>, d'un cabinet d'histoire naturelle dont <i>M. Lister</i> fit présent & de diverses antiquités romaines, comme autels, médailles, lampes, etc.</p> <p>これ以降、このコレクションは著しく増え、中でもハンチントン博士の寄贈したエジプトの非常に多くのヒエログリフと様々な珍しいもの、グッドイヤー氏の寄贈の完全なミイラ、リスター氏の寄贈した博物学のキャビネ、そして祭壇・メダル・ランプのような古代ローマの色々な古美術などである。</p>
<p>Over the Entrance of the <i>Museum</i> is this Inscription; MUSEUM ASHMOLLEANUM, SCHOLA NATURALIS HISTORIE, OFFICINA CHYMICA.</p>	<p>Over the entrance of the <i>museum</i> is this inscription; MUSEUM ASHMOLLEANUM, SCHOLA NATURALIS HISTORIE, OFFICINA CHYMICA.</p>	<p>ミュージアムの入り口の上にこの文字がある；「アシュモレアン・ミュージアム、博物学教室、化学実験室」</p>	<p>A l'entrée du <i>musée</i>, on lit cette inscription: <i>Museum ashmolecanum, Schola naturalis historiae, Officina chimica</i></p> <p>ミュージアムの入り口に、次の文字が読める；「アシュモレアン・ミュージアム、博物学教室、化学実験室」</p>

書誌データ				
所蔵	京都大学	Bibliothèque de National de France (*不詳)		
フォーマット	1988年臨川書店刊行、1728年版の復刻本	PDFのリプロダクションを収録 (* Google Books)	Stuttgart-Bad Cannstatt : F. Frommann Verlag (G. Holzboog), 1966, première édition de 1751-1780のリプリント版	
年	M. DCC. XXVIII.	M. DC.C. XLII. (* M. DCC. XLI)	M. DCC. LXV	
版		The fifth Edition (*THE FIFTH EDITION)		
印刷地	London, printed for James and John, John Durbey, Daniel Midwinter, Arthur Bettesworth, John Senex, Robert Gosling, John Pemberton, William and John Innes, John Osborn and Tho Longman, Charles Rivington, John Hooke, Ranew Robinson, Francis Clay, Aaron Ward, Edward Symon, Daniel Browne, Andrew Johnston, Toas Osborn	Dublin, printed for R. Gimne, R. Ower, J. Leathly, G. Ewing, W. Smith, P. Crampton, A. Bradeley (*London, printed for D. Midwinter, W. Innes, C. Rivington, A. Ward, J. and P. Knapton, S. Birt, D. Browne, T. Longman, R. Hett, C. Hitch, T. Osborne, J. Shuckburgh, A. Millar, J. Pemberton, F. Gosling, M. Senex, J. Hodges)	à Neufchâtel, chez Samuel Faulchs & Compagnie, Libraires & Imprimeurs.	
巻	全2巻	全2巻 (*全2巻)	全35巻	

A Study on the Words, ‘museum’ and ‘musée’ in *Cyclopædia* by Chainbres and *Encyclopédie*

DAI Yoshiko

In this paper, I aim to clear the relation and difference of the definitions between the words, ‘museum’ in Britain and ‘musée’ in France in 18th century. For that, I would compare these words in *Cyclopædia* and *Encyclopédie*.

These texts to be used are the reprint edition of the first edition of *Encyclopédie*(1751-1780) published in 1966 from Friedrich Frommann Verlag, and the Dublin version fifth edition of *Cyclopædia*(1742).

Both texts consisted of two elements, the Museion of Alexandria and the Ashmolean Museum. In my research, I confirmed that the Museion in *Encyclopédie* was cited from ‘Dissertation historique sur la Bibliothèque d’ Alexandrie’ by Bonamy in the *Histoire de l’Académie royale des inscriptions et belles-lettres, avec les Mémoires de littérature tirés des registres de cette académie*, Tome9, and the Ashmolean Museum in *Encyclopédie* was cited and translated in French from *Cyclopædia*.

Then, I would make clear the definition of musée in France. In 18th century, the Ashmolean Museum in Britain was used the word ‘museum’. However, in France, the room for keeping and display rarities were not called musée. In *Encyclopédie*, the word and description for exhibition facilities was ‘cabinet’. The word ‘cabinet’ means a display room and container of rarities and etc., and the word ‘garellie’ means a corridor for exhibiting paintings, statues and ect.. During that days in France, it seems that the word ‘museum’ has only mean as the Museion of Alexandria. The exhibition room and container of rarities were called by architectural terms such as ‘cabinet’ and ‘gallerie’.